

八月九日

富士嶺聖徳寺へ。上九一色村役場確認申請手続きの件を確認。

前村長の渡辺さんに会う。温厚な人物であった。いよいよ聖徳寺の現場が始まるが、平穩に事がすすむことをいのりたい。夕方六時帰京。

高橋工業社長世田谷村に来る。

鉄製の墓について打ち合わせ。高橋社長も会社のカジ取りがむづかしい時だろうが、頑張ってもらいたい。独特な技術を持った鉄工所を目指すしかないだろう。

八月十日

朝九時杉並の渡辺さん夫妻世田谷村に来る。

私のホームページを見て住宅作りの相談にみえた方だ。今日はこんな家をどうでしょうの、打合わせで、私の住宅作りへの考えを少し聞いていただいた。できるだけ大きな家を安く作るのが、私の基本方針で、その為に私のところのスタッフが一部施工もする、すなわち世田谷村方式について話しを聞いてもらった。世田谷村を見てもらいながらの話して、解ってもらえたような気がする。その方式に同意していただけたら私の住宅作りの第三ステップの始まりとしたい。

板橋の6軒の住宅も秋から本格的に再開したい。設計事ム所としてだけでなく、かと言って工務店になり代るといってもない。

建築家が大工職人労務者の真似事をしては仕方ない。しかし設計図を作成するだけでは住宅の本質、つまりコストの問題に接近することはできない。設計を含めたモノを作る人材をより多く育成しなければ駄目なんだ。建築家が出現する以前の棟梁のような人間がある種の理想型なのだろうが、棟梁は親分的なそしてその親分的な位置が永続する、永続させねばならぬようなイメージがある。そうではなくてもっと気楽な感じが良い。三〇代で年に三軒住宅を設計施工したら年収一千万円になるくらいの感じだ。三十代で始めて三十年間働く。一生に九〇軒から百軒の家をつくる。決して欲張らない。人生としては結構充実していると思うが、どうだろうか。

八月十一日

今日から休みのような状態に入る。

夕方、鈴木博之藤森照信が来宅するので楽しみだ。四時、にわか雨降る。丁度、来客のための涼気を呼んでくれて良かった。

五時前、両夫妻到着。

鈴木さんは鈴木さんらしく、藤森さんは藤森さんらしく世田谷を見てくれた。五〇も半端をこえると、次第に附合っている友人の数が減ってくる。知り合いの数は加速度的に増加するのだが、友人は減少する。附合いにはエネルギーが必要だから、そのエネルギーが減少するという事なのだろう。エネルギーはで減少する、しかし蒸留されて濃度は濃くなってくる。

鈴木藤森共にある種の天才だ。私には無いモノを多く持っている。若い頃には弱干の競争心もあって何とか私に無いモノを学んで得ようとしたが、今はもう手遅れだ。無いものは無いモノで仕

方がないと思うようになった。私は私であり、鈴木藤森共にどうしようなく鈴木藤森である。鈴木は都市に生きる樹木で、藤森は山野に生育する樹木に例えられる。都市の大樹は複雑に生い茂る。空気の汚染や地下水脈の枯涸と常に闘わねばならない。人工的に生きる知恵が必要だ。鈴木博之の面白いところはその人工が自然に才質の中にあつたことだろう。藤森照信は俗に言う、自然児である。しかしそれはターザンの如き野性を意味しない。鈴木のような人工と相対して際立つ野性なのだ。藤森は近代的自然を備えている。

それ故この二人は極めて新しい相対性を所有している。相対的自我、あるいは相対的私性と呼ぶべきものだ。私性という事に關して双方共に極立っている。そこらに転がっている建築家芸術家作家の私性の粹をはるかに超えた私を持っている、あるいはそれを自覚しているようなところがある。この自覚こそが現代の特質だろう。

自分は他の人間とチョツと異なる何か、歴然とした私というものを所有しているという自覚。それはある種のエレガンシーを持たぬと鼻持ちならぬ者になるのだが、二人はそれをヴェールにくるむ才質も持っている。秘かに自分本来の赤裸々さから隠れていようとすると本能がある。ともあれ、驚くべき私性の持主であることに間違いがない。奥さん方が御一緒だったので、又そのことがそれぞれ私性を際立たせた。

十時半まで寄合いは続いた。久し振りに楽しい一日だった。

八月十二日

午後軽井沢磯崎山荘へ。押しかけ休養。正子友美も一緒。霧にまかれて予想以上に涼しい。

例によつて磯崎さんが料理を作る。この大建築家の不思議な一面。絵描きになりたかつたそうだが、それを許す程頭脳がルーズではなかつた。だから、絵を描くように料理の手を動かしているのだ。ボンゴレが異常にうまかつた。根深いイタリア好みがよく現われている。

宮脇愛子さんは佐賀のW・Bワークショップに無理を承知で来ていただくので、その打合わせ。結局二六日〜三〇日まで来ていただく事になつた。人生を語っていたで良い慣録で、本当はお好きな様に、お好きなスタイルでお話下されば良いのだけれど、矢張り打合わせの形式をとるべきで、これは礼儀である。

八月十三日

朝、磯崎さんが友美に三冊本をプレゼントしてくれた。昨年来五十嵐太郎がインタビューしていたもので、篠山紀信との建築行脚全十二巻のチョツとした焼直しだと思っていたら、全く新しい形式のもので仰天した。七〇才の人間のやることじゃない。何故こんなに勉強するのか。全十二巻のシリーズのポリウムを想像すると膝が落ちる。全く自分が恥かしくなつた。こんな所でゆっくり休んでいる場合じゃない。開放系技術論、磯崎新論共に進行していないのを恥じるのみ。

少しばかりジツとしてようかと思ひ始めていた自分をふるい立たせなくてはならない。夜にでも一人で帰京しようかと家族に相談したら、勝手にしなさいバカと言われた。こいつ等は全く男の辛さつてものを理解していない。

八月十四日

早朝五時半起床。愛子さんが窓から手をふつて送ってくれた。

もう一泊する家内とテラスでタクシーを待つ。結局、軽井沢の磯崎山荘では自分の悲力と怠けグセを思い知らされたようなものだし、しかし、もともと本を読んで磯崎さんに追いつけるものではないのだから、これも又、私は私と覚悟するしか無いのは知れた事でもある。五〇代の厳しさをイヤと言つ程に思い知った。

磯崎さんのギフの計画の話しを聞いていて、施主のセルフエイド系のアイデアが少しまとまった。要するにモノを作ること自体の面白さは私にばかりあるのじゃない、あなたにもあるって事。それをやさしく実利的に説きおこす方法の問題だ。

七時五九分東京着横須賀線で鎌倉へ。

九時半鎌倉近代美術館。リチャード・バックミンスター・フラー展見学。清々しい展覧会だった。一九三〇年～五〇年アメリカが最もアメリカらしかった頃の特大の個人だ。その交友関係も含めて充足した人生であった事が了解できる。二〇〇一年現在はRBFの生きた時代よりも、現実自体が虚構化している。バスタブユニットの展示や、ウィチタハウスのモデルに見られる実物をつくった時代のアメリカの匂い。たち込める実物の匂いが会場に感じられた。肉筆、肉声で考え、コミュニケーションしていたフラーを感じる事ができた。部厚いカタログ、ユア・プライベートル・スカイを買って帰る。午後一時前世田村に帰る。バウハウス大学のエトリンガーが来ていてムニヤムニヤ何か言っているが佐賀へ出掛けねばならぬ。置去りにして出発。遂にこの男とはコミュニケーションできなかつた。仕方ない。肩肘はって国際交流するつもりはない。

十七時五五分のANAで佐賀へ。明日から百四名の参加者と共にW・BWORKSHOPが始まる。空港で難波和彦さんと会う。機内でオレゴン大学のケビン・ニースと会う。十九時半佐賀空

港着。佐賀ニューオータニーに投宿。鈴木博之さんと再会。飛行機の中で読売新聞の原稿書き上げたので気持ち少し楽になった。原稿の数々がプレッシャーで辛い。

八月十五日

朝九時、鈴木博之講義。十時四十分、石山講義。参加学生百一名のワークショップ順調に滑り出す。

午後、課題開始。例年通り、「死を待つ母の家」今年は2回生以上の参加者のために、「シングル・マザーの家」をオプションでつけ加えた。明日、三時まで提出せよと言うハードなものだが、この課題は全ての参加者の人格が表れるのでいつも面白い。

午後、三時ホテルで休養。室内の原稿書き上げる。少しづつ肩の荷が降りてゆくのが嬉しい。我ながら単純だ。